

誰しもそうだとは思いますが、ガンは平凡な日常、突然に訪れたのでした。私は二年前、乳がん告知を受け、一番にしたことは、身辺整理でした。まず、退職し、社会との関わりを断った私は、極秘の闘病に専念する日々でしたが、かねてより、仕事とは別に大きな難題を抱えていたことにも、名実共に命懸けの時間との争いがはじまりました。これを終えない限り、私は死ねない…と。そして、いつ死んでもいいように…とも。

優先順位を変動させ、ひたすらベッドで天井だけを見つめて耐え忍ぶ日々、術後笑ったのも束の間、次の治療の抗がん剤の副作用に心身を打ちのめされ、家族に隠れて涙を流した日々は数え切れません。

かつらを被り、難題に臨んでは、Dr.に「あとどれくらい生きられますか？」と迫り、困らせたのも、今となっては恥ずかしいシーンです。先送りできることは、焦らず時を待ち、それよりも「必ず元気になるんだ！」と信じることも大切だと、教わりました。

只今、53歳、手術でなくした乳房は戻らないけれど、屈辱感で押しつぶされた一番辛かった脱毛からも解放されて、ゴムで縛れるくらいに伸びた髪、に女を取り戻し、元の暮らしに戻りつつある今日、心を閉ざした私が、人を信頼するということの大切さの再認識にたどり着いたこの二年間は、人生の試練、修行の場であったと確信しています。

私のがんを中心として、様々な人間模様が繰り広げられましたが、だれもが、それぞれの持ち場で精一杯のサポートをしてくれたこと、そして、私の知らないところで流されたそれぞれの涙を決して忘れてはならないと、感謝の念でいっぱいです。

ずっとあのままの健康体であったならば見えなかったことが、病気になり、少し視えてきたのかもしれない…。

最近では、がん細胞の気持ちになってみたら…と発想の転換をし、がん細胞が居心地のよくないであろう「笑顔でいきいき、ストレスを溜めない生活術」を探求しています。

彦根城